

## to 不定詞補文及び動名詞補文における選択制限 —起動動詞 *grow, proceed, commence, resume* を例に<sup>1</sup>—

藏 園 和 也

(大阪工業大学)

### 1. はじめに

出来事の「開始」を表す起動動詞には数多くの類義語が存在する。本研究では、起動動詞 *grow, proceed, commence, resume* が統語形式 *to* 不定詞もしくは動名詞を従えた表現 *grow to V, proceed to V, commence to V, commence V-ing, resume V-ing* を起動表現と呼び、それぞれの表現の意味や統語的な振る舞いがどのように異なるかを説明していく。

学習英和辞典・英英辞典や先行研究を見てみると、起動表現に関して「使用域」や「スピーチレベル」の違いについての説明はみられるが、意味の違いは必ずしも明示されていない(以降、太線・下線は筆者による)。

### 2. 辞書・先行研究の記述

まず、学習英和辞典であるジーニアス英和辞典第5版(以降、G5)を見てみると、*grow to V* は「...するようになる」という意味を表し、*to* 不定詞補文では「心理状態や認識、感情を表わす動詞が用いられる」と説明されており、*feel, know, like, hate, respect, sense, suspect, think, want, wonder* のような動詞が生起するという説明が見られる。また、ウィズダム英和辞典第3版(W3)では、*grow to V* は「*get* と違ってある出来事に至るまでの「時間の経過」が示唆される」とも説明されている。

第二に、*proceed to V* は「〈人が〉次に...する[し始める]」(W3) という意味や「続いて...する」(G5) という意味を表わすとされている。また、「時に驚き・当惑を表したり、おどけて用いたりする」(G5) こと、「しばしば意外な行動や不愉快な行動について用いられる」(W3) という点で他表現とは異なる。

第三に、*commence to V, commence V-ing* についてユースプログレッシブ英和辞典(以降、YP)を見てみると、どちらの表現も開始の意味を表し、形式的な場面で使用されるという説明が見られる。また、統語的には普通は動名詞補文をとるが、*to* 不定詞補文もとることが可能だと説明されており、*to* 不定詞補文と動名詞補文を比較すると 3 対 7 の割合で使用されているという量的な調査結果が示されている。

最後に、*resume V-ing* は「〈人が〉(中断していた)A〈話・活動など〉を再開する、再び始める」(W3) という意味を表わす「堅い」表現であり、*resume* の補文ではしばしば動名詞が用いられると説明されている。

### 3. 先行研究

本節では、*to* 不定詞と動名詞の先行研究を概観し、補文でそれぞれの構文が使われる際の意味的・統語的な特徴についてどのような分析がなされてきたかを見ていく。さらに、起動表現 *grow to V*, *proceed to V*, *commence to V/V-ing*, *resume V-ing* それぞれがどのような意味的・統語的特徴を持ち、それぞれの補文でどのような意味特徴を持つ動詞が使われるかについての説明を先行研究で確認していく。

#### 3.1 アスペクト研究

アスペクトとは、出来事が開始したか過程にあるか、それとも終結したかという観点から状況を見る方法であり、長い間、完結 vs. 非完結や有界 vs. 非有界、語彙アスペクトといった観点から論じられてきた。

完結性・非完結性 (*perfective/ imperfective*) とは文法形式を用いて表されるもので、例えば *have + Vp.p.* や *be + -ing* の形で示されるもの (Declerck, 1991: 55ff) である。また、有界性 vs. 非有界とは、状況が終結するかどうかを問題とし、終結する場合を有界 (*bounded*)、終結しない場合を非有界 (*unbounded*) という。主語や目的語に影響を受けると言われている。語彙アスペクトとは、動詞が表す出来事が開始したか継続過程にあるか、それとも終了したかを指す。

これらの研究からも分かるように、事象アスペクトの区分には「開始・過程・終了」があるとされてきた。例えば、Vendler (1957) では動詞を (1) のように 4 分類し、具体例を示しつつ、状態動詞・到達動詞・活動動詞・達成動詞を定義した。

(1) States: desire, want, love, hate, know/ believe

Achievements: recognize, find, win the race, stop/ start/ resume, be born/die

Activities: run, walk, swim, push a cart, drive a car

Accomplishments: run a mile, walk to school, paint a picture,

grow up, deliver a sermon, recover from illness

(Binnick, 1991: 172) を参照

状態動詞は終わりのない状態の継続を表すので進行形では現れない (2a)。一方、進行形で使える動詞を動作動詞とし、期間副詞句 *for* や期間を尋ねる *How long ...?* と共起できて継続と終了の意味を表す *draw the circle* のような動詞句を (2b) を達成動詞と呼んだ。活動動詞 (2c) は継続を表すので期間副詞句 *for* と共起できるが、進行形で表した場合に終了の意味を表さない *push the cart* のような動詞句を指す。一方、時間枠を限定する副詞句 *in* や *At what time ...?* と共起できて行為が瞬時に完結する *reach* のような動詞 (2d) を瞬間動詞とした。以下に、統語テストの例を挙げておく。

(2) a. “What are you doing?” “\*I’m knowing (or loving, recognizing, and so on).”

b. How long did it take to draw the circle?

c. How long did it take to push the cart?

d. At what time did you reach the top?

(Vendler, 1957: 144-7)

### 3.2 to不定詞と動名詞の意味

動詞の表す事象アスペクトの意味区分に関して、Freed (1979) は行為が実際に行われる前の段階を指す準備段階 (preparatory stage) という意味区分を設定し、新たな事象アスペクト分析の基礎を築いた。藏菌 (2016) 及び Kurazono (2018) では *to* 不定詞が準備段階における段階的变化と瞬間的变化に分類できることを実証的に示した。また、動名詞が「過去の既に実現された出来事」を表す場合と「未実現の出来事ではあるが、頭の中で実現を想起して具現化している段階」の両方を表すことが出来ることから、事象アスペクトの意味区分である「開始」「過程」「終わり」の上位概念として「実現段階」を新たに設定し、起動表現の意味分析の詳述化を試みた。本研究では、アスペクト的意味区分を Kurazono (2018) に基づいて表 1. のように区分し、研究対象とする各起動表現がどのようなアスペクトの意味を表すかを必要に応じて確認していく。

表 1. 事象の時間構造の意味区分 (Kurazono, 2018: 46 の Table 4.6 The Temporal Structure of the Event as Discussed in This Study を日本語で提示)

準備段階	実現段階		
	開始	過程	終わり

### 3.3 *grow to V* に関する記述

小西 (編) (1980: 673, 677) では、*grow to V* は「次第に変化して... するようになる」という段階的な変化を表し、*to* 不定詞補文で *like, hate, know, believe, think* などの動詞が補文で用いられると説明されている。また、Brinton (1980: 130) は状態動詞とのみ共起すると説明しており、状態動詞との強い結びつきが示唆されている。

### 3.4 *proceed to V* に関する記述

伝統文法の時代に遡ると、*proceed to V* は「活発 (vigorous) な活動」の開始を表わす (Curme, 1931: 379) という記述も見られる。また、小西 (編) (1980: 1130) は、休止などをはさむ前後の動作が違う場合に「...を始める」「...し始める」の意味になると説明している。Palmer (1988: 202) は「成功した」「うまくいった」という含みを持つという。

一方、統語的な特徴について小西 (編) (1980: 1130) は「今までしていたことをやめて次のことをし始める」の意なので *then* や、*then* と類似した語句と共に用いる場合もあると説明している。また、Brinton (1988: 128) では、中英語の時代には *proceed to V* が意思疎通の動詞と共起している例が普通に見られたといわれている。

### 3.5 *commence to V/ V-ing* に関する記述

小西 (編) (2006) によると、*commence* は (i) 通例、長期間にわたってまたは入念に準備した行為の開始を表わす場合と、(ii) 緊迫した雰囲気をかもし出している場面での使用がみられるという。さらに 小西 (編) (1980: 123) では、フランス系の堅い語、法律上の手続き、宗教上の儀式、軍隊内の手続きなど堅苦しい行事や出来事に適しているとされ、スピーチレベルの違いに焦点が当てられている。

### 3.6 *resume V-ing* に関する記述

以下では、*resume V-ing* について詳しい記述がみられる Freed (1979) の分析について見ていきたい。*resume* の語源はラテン語で、フランス語を経由して英語に入ってきた、口語よりもむしろ形式的な場面で使用される語である (Freed, 1979: 99)。

また、*resume V-ing* は行為の「再開」を表すため、会話の再開を表す文 (3a) は (3b) のような会話の再開の前に会話が一度中断されているという前提が示唆されるという。

- (3) a. Carol resumed talking even though we asked her to keep quiet.  
 b. Carol had stopped talking when (or before) we asked her to keep quiet.  
 (Freed, 1979: 99-100)

さらに、アスペクトの観点から、(4a) のような時点副詞 *at 10:00 A.M.* と共起する例は容認され、(4b) のような継続を表す副詞句 *for two hours* と共起する例は容認されないという。そのことから、*resume* を含む文は「行為の継続」の解釈ではなく、完結的な解釈 (perfective reading) が行われるという。

- (4) a. The two sides resumed negotiating at 10:00 A.M.  
 b. \*The two sides resumed negotiating for two hours. (Freed, 1979: 101)

このように *resume* が完結性を持つことから、(5) のように *V-ing* を使う場合よりも (6) のような名詞、特に派生名詞 (derived nominals) の方がより適切だという。これは *V-ing* が非完結性 (imperfective) を持つのに対し、(6) の名詞が有界性を持つ活動 (bounded activities) を表すので完結性を持つ *resume* との親和性が高まることに起因する。

- (5) a. The two sides resumed negotiating.  
 b. My chairman and I resumed discussing the problem.  
 c. The gangs resumed fighting when police left.  
 (6) a. The two sides resumed negotiations. (Freed, 1979: 101)  
 b. My chairman and I resumed the discussion of the problem.  
 c. The gangs resumed the fight when police left. (Freed, 1979: 101)

一方、行為の継続を表さない到達動詞 (achievement) は (7) のように *resume* とは共起しない。また、達成動詞 (accomplishment) は完結的で開始・終了を表すので共起できると予想できるが、継続 (ongoing) の解釈が *resume* の持つ完結性とが対立するため (8a,b) のように不自然となる。しかし、派生名詞を用いて (8c) のように書くとよくなるという。以下に例を引用しておく。

- (7) a. \*He resumed catching the dog.  
b. \*We resumed identifying the photograph. (Freed 1979: 102)
- (8) a. ?My father resumed painting the portrait.  
b. ? Barbara resumed writing her dissertation.  
c. Barbara resumed the writing of her dissertation. (Freed 1979: 102)

意図性に関して、*resume* は行為への意図的な働きかけを含意するので、(9a) は使役性を表す *cause* を用いた (9b) のように表すことができると説明している。

- (9) a. Marsha resumed knocking things down as she walked through the store.  
b. Marsha resumed causing things to fall as she walked through the store. (Freed 1979: 104)

ただ、歯の状態の悪化 (10a) や病気からの回復 (10b) のように、自分の意志ではどうにもならないような出来事の再開を表す場合には容認されない。たとえ、(10c) のように達成を表す動詞 *recover (from his illness)* を名詞化したとしても、意図的に行えない行為を *resume* を用いて表すことはできないという。

- (10) a. \*Topsy's teeth resumed decaying.  
b. \*Following a slight relapse, the old man resumed recovering from his illness.  
c. \*Following a slight relapse, the old man resumed the recovery from his illness. (Freed 1979: 103)

### 3.7 先行研究の課題

ここまで先行研究を概観してきたなかで、レジスターやスピーチレベル、コロケーションに関しては、ある程度の記述が見られた。一方で、(11) のような個別の疑問に対する明確な答えは提示されておらず、先行研究にある記述の検証も必要であると思われる。

- (11) a. *grow to V* では、なぜ状態動詞が用いられる傾向が強いのか。  
b. *commence to V, Ving* ではそれぞれどのような動詞が用いられる傾向があり、どのような意味の違いが見られるのか。

- c. 現代英語において *proceed to V* では、どのような動詞が用いられる傾向にあるのか。
- d. *resume Ving* の補文で用いられる動詞はどのようなものか。

本稿では、統語形式が異なれば意味も異なるという Bolinger (1977) に見られる「意味と統語の対応関係」を認める立場をとりつつ、起動動詞の補文で用いられる動詞の違いにみられるような統語的な相違から起動表現それぞれの意味的な相違について検討してみたい。

#### 4. 分析方法と結果

本研究では対象とする起動表現 *grow to V*, *commence to V*, *proceed to V*, *commence Ving*, *resume Ving* の補文で、どのような性質の動詞が用いられるかを量的に調査した。さらに、それぞれの表現で用いられる傾向が強い動詞を抽出し、どのような意味特性を持つのかについて質的に分析した。これらの調査に用いたコーパス及び分析方法、そして分析結果について説明していく。

##### 4.1 利用したコーパスと除外例

まず、方法としてイギリス英語を中心に書き言葉や話し言葉をバランスよく収集した大規模コーパスの一つである The British National Corpus (以降、BNC) の共起語検索<sup>2</sup> を利用して、各起動表現の補文で用いられる動詞を抽出した。ただし、調査結果の値は、起動表現自体が「～するようになる、～し始める」という起動の意味で用いられていない (12) のような例や同じ内容で重複している例については研究対象から除外したものを記載している。例えば、(12a) では *grow* が「成長する」の意味を表し、(12b) では *to identify...* が目的用法で用いられている。また、(12c) では *beginning* が「初旬」の意味で用いられており、さらに (12d) では *dumping* が「(ゴミの) 投棄」という名詞として用いられている。

- (12) a. ‘... Olive trees can grow to be well over a thousand years old.’ (BNC)  
 b. Detailed planning has commenced to identify the scope of work. (BNC)  
 c. His training commences beginning June. (BNC)  
 d. They agreed to observe the moratorium, and to resume dumping after 2007 only in consultation with other signatory states. (BNC)

一方、BNC による調査では *commence* や *resume* の補文で生起する動詞の総数が少なく、調査に限界があるため、The UK Web Archiving Consortium (以降、ukWaC) というコーパスを用いて用例の調査を行った。ukWaC は 2005 年から 2007 年の間に United Kingdom の国別ドメイン、いわゆる uk ドメインのウェブページを基に構築された 15 億語からなるコーパスで 1 億語から成る BNC の約 15 倍の規模を有する。イギリス英語が中心で、教会での説教や調理レシピ、技術手引き書から短編小説、話し言葉の記

録などから構成されている (Ferraresi et al., 2008)。

## 4.2 量的調査の結果

BNC の調査結果は、*grow to V* には *love, be, know, hate, understand, expect, accept, look, think* のような状態動詞が用いられることを示している。また、*proceed to V* には動作動詞の中でも *tell, consider, discuss, demonstrate* のような意思を伝達する行為を表す動詞がみられるのが特徴である。さらに、*commence to V* には一般的な行為のほか、ビジネスに関する *trade* のような単語が見られる。ukWaC の調査は *commence to V* に動詞 *be, develop, get* をとれることを示している。一方、*commence V-ing* は BNC で *trade, run* を、ukWaC で *run, operate* を取ることから、企業の経営に関わる語が共通している。

表 1. BNC SKE にみる起動表現に共起する補文動詞とその生起頻度 (上位 10 語)<sup>3</sup>

[1] *grow to V* にくる動詞 :

love (24), be (21), know (16), like (12), hate (7), understand/expect/accept/look (5), think (4).

[2] *proceed to V* にくる動詞 :

do (25), make (19), tell (16), give (14), consider (13), examine (12), take (9), discuss (8), demonstrate (7), win (5).

[3] *commence to V* にくる動詞 :

read/trade/write (2), blackmail/clean/diet/dive/draw/get/have/play/polish/prevent/promenade/replace/revolve/run/salvage/talk/thrash/turn/walk (1).

[4] *commence V-ing* にくる動詞 :

trade (13), train (4), run (4), make (3), feed/go/pay/sit/work (2), bomb/breed/buy/deliver/drill/fiddle/have/look/move/operate/peck/pour/receive/research/retrain/ring/rub/spray/study/shoot/take/talk/teach/throw/transmit/use/wrap (1).

[5] *resume V-ing* にくる動詞 :

train (10), fight (4), bomb/drive/pace/play/sell/send/send/trade (2), bat/campaign/carve/explore/flower/fun/give/grin/kill/make/pilot/poke/publish/run/serve/speak/teach/use/walk/write/talk/search/shout/sit/stare/supply (1).

表 2. ukWaC にみる起動表現に共起する補文動詞とその生起頻度 (上位 10 語)<sup>4</sup>

[1] *commence to V* にくる動詞 :

be/use (19), work (16), get (9), make/build (8), take (7), charge/search (6), develop (3).

[2] *commence V-ing* にくる動詞 :

work (62), build (30), play (23), make (21), write (18), operate (19), dig/take (18), run (14), use (13).

### [3] *resume V-ing* にくる動詞 :

train (104), play (51), test (48), work (24), drive/run (19), live (11), write (10),  
tour (9), eat (8).

## 4.3 質的調査の結果

量的調査で上位にくる動詞を調査していくと、それぞれの起動表現が特徴的な動詞や副詞相当語句、構文などと共起する例が見られた。以下では各起動表現と共起する特徴的な語句や構文について観察することで、各起動表現が表す典型的な意味を示していく。

### 4.3.1 *grow to V* の特徴

BNC による補文動詞の調査では、*grow to V* と状態動詞との結びつきが強い傾向が見られた。さらに、共起語を見てみると、(13) で期間を表す副詞句 *Over the years* や段階性を表す *gradually*、さらに比較を表す *better* と共起していることからわかるように、*grow to V* がある期間かけて行われる段階的な状態変化を表すことが確認できる。しかし、なぜ状態動詞が共起しやすいのかについては先行研究では説明されてこなかったもので、後に議論を進めたい。

- (13) a. She remembered being told that Nahum was dead. **Over the years** she had grown to love him in a familiar, comfortable sort of way, though of late a change in temperament had made him difficult. (BNC)
- b. Cooper **gradually grew to hate** Sutherland, and as John Richardson says, ‘He remarked on more than one occasion that he would ‘do a Lady Churchill’ on it’ (referring to Lady Churchill’s infamous burning of a much-despised Sutherland portrait of her husband, Sir Winston). (BNC)
- c. ‘All I need to know is in your demeanour. We shall soon grow to know each other **better**.’ (BNC)

### 4.3.2 *proceed to V* の特徴

BNC の用例を調査する中で、*proceed to V* が「人が（詳細について）話し・思考を始める」という意味で使われているという共通性が見られた。例えば、(14a) では男性が良識のあるコメントを人に与える場面である。また、(14b) では詳細について女性が男性に話し始める場面で、(14c) では実際の状況を詳しくやって見せて示している。さらに、(14d) でも人が詳細について熟考し始めるという場面で思考内容が読み手に示されている。

- (14) a. He then proceeded to make some characteristically common-sense comments which might seem to carping critics to pre-empt that inquiry, .... (BNC)
- b. ‘There’s a message from Bill,’ she said, then proceeded to give him the



- details. (BNC)
- c. And when she protested she never lay like that and had proceeded to demonstrate how she did lie, crossing her legs and pulling her knees up, ... (BNC)
- d. Before we proceed to consider the question as to whether there can be a Christology which is not incompatible with feminism, I should like to point to the significance of this question for Christians. (BNC)

一方、*grow to V* と比べると、*proceed to V* は *at once* のような時点を表す副詞句と共に共起する (15) ことから段階的変化というよりも、準備段階における瞬間的変化が起きて行為がすぐに開始されることを表している。

- (15) a. But the inhabitants of Galtres Forest did not wait. They **at once** proceeded to make a perambulation without authorization, and .... (BNC)
- b. ... and he **at once** proceeded to examine more closely what it was that had arrested his attention .... (BNC)

#### 4.3.3 *commence to V/ V-ing* の特徴

次に、*commence* が *to V* をとる場合と *V-ing* をとる場合の特徴について示していく。まず、BNC の調査結果から *commence* が *to V* を従える場合には、軍隊に所属する者が命令書を書く場面や海に落ちた旅客機 Concorde の救助といった場面での使用 (16a,b) のような例がみられる。これは *commence* が形式的な、緊迫した場面で使われるという先行研究からの記述からも理解できる。そして、*commence to V* は (16c) のように時点副詞句 *At 1pm* と共起し、準備段階における瞬間的な変化を表すことができる。実際、(16c) は連隊の塹壕奪取がすぐさま開始した状況を表している。一方で、ukWaC を用いた調査結果では、動詞 *be* や *get, develop* などとも共起できることが示されている。

- (16) a. And as a result of that reconnoitre, where did you then go? I then returned back to the er police station where I commenced to write the operational order in respect of the incident. (BNC)
- b. I had in mind the possibility of a UK registered Concorde crashing into the sea just outside the three mile limit of some State while making an approach to land there and possibly the Russians or some of their friends commencing to salvage it before we could do anything about it. (BNC)
- c. **At 1pm**, the regiment commenced to take over a portion of the front line trenches, relieving the 8th Hussars. (ukWaC)

では、*commence V-ing* との相違点はどのようなものであろうか。状態動詞との共起は

みられないことが大きな特徴といえる。軍の空爆開始のような場面 (17) にも使われるが、特徴的なのは *operate*, *run* などを用いて会社や公共機関のサービス開始を表す例 (17b,c) である。一方、*commence to run* で会社のサービス開始を表すのは (18) の 1 例のみであった。

- (17) a. At 6.30 a.m. on 1st. September 1939, German troops invaded Poland and his airforce commenced bombing Polish cities. (BNC)  
 b. The current proposals are that Metro will commence operating between South Hylton Pelaw Newcastle with a daytime frequency of 6 trains an hour or approximately every 10 minutes. (ukWaC)  
 c. "By May 1905 the Company were ready to start a service but for the fact that their Power House was incomplete". Trams commenced running on 10th June 1905 but the system lasted only until 12th July 1925 when buses took over. (ukWaC)
- (18) Buses and Coaches commenced to run from the twenties later being registered as 'Hansons Buses Ltd' registered 15 April 1935, buses and lorries used the same garages at Milnsbridge .... (ukWaC)

#### 4.3.4 *resume V-ing* の特徴

*resume V-ing* に関しては、継続的な行為でも、戦闘行為や歩くなどの具体的な身体的行為の開始 (19a,b) を表わす例が見られる。怪我からの試合への復帰やスポーツ、トレーニングなどの行為を表す動詞 (19c) も多く見られる。アスペクトの観点から観ると、*resume V-ing* は (19d) のように継続を表す副詞句 *for the most of time* と共起して、生演奏するという行為が再開後に彼の持つ時間の大半を費やして継続されていた様子を表す。これは、*resume V-ing* が用いられた場合には完結性 (perfective) の読みをするという Freed (1979) の説明に反する例である。

- (19) a. Frustrated by the delay in the peace talks, Polisario has resumed fighting and claims to have occupied 10 miles of the Moroccan lines. (BNC)  
 b. He resumes pacing, then, spinning on his heels to avoid the wall, .... (BNC)  
 c. After further examination the club can confirm that Emyr Lewis has suffered a broken Fibula in his leg. As a result he will be in plaster for approximately 4 weeks following which a further review will take place. The club however are hopeful that he will be available to resume playing before Christmas. (BNC)  
 d. In 1989 Steve signed up with Amphonic Sound Stage in London and has been releasing music with them ever since. In 1990 Steve resumed playing live **for most of the year** and then began writing music for film and TV.

Steve's music has been heard in such programmes as .... (ukWaC)

## 5. 議論

以降では、今まで見てきたある起動動詞と特定の語と語の共起といった統語的な振る舞いがどのような意味的要因のために生じているのかについて議論していく。意味と統語との関係性について詳細に見ていきたい。

### 5.1 *grow to V* と状態動詞

BNC による調査では、*grow to V* と状態動詞との結びつきが強い傾向が見られた。それでは、*grow to V* と状態動詞がなぜ結びつきやすいのかの理由を考えてみたい。

まず、*to* 不定詞は構文的意味として、*to* の目的語への移行 (movement) を表し (Curme, 1931: 456)、その移行の終点として *to* 不定詞で表されている出来事の実現を表す (Duffley, 2012: 123-4) とされる。

次に、*grow* は成熟を意味する (OED Online s.v., GROW v 13a) ことが、物事の変化・成熟を観察しやすい精神や感情と関わる状態動詞との親和性を高めている。また、*grow* は過程動詞 (Leech, 2004) とされ、過程動詞は (20) のように進行形で状態変化の過程を焦点化する意味機能を持つ。

(20) a. The weather is changing for the better.

b. It's getting late. (Leech, 2004: 25)

最後に、状態動詞自体が変化を表すという特性が *grow to V* と状態動詞との共起可能性を高めている要因となっていると考えられる。実際、吉川 (1995: 159) では、一部の状態動詞が *gradually, better, less and less* などの副詞相当語句と共起して、段階的変化を表す (21) と説明している。

(21) a. I'm hearing you better now.

b. It's mattering less and less.

c. I'm gradually forgetting all the French I ever learnt at school.

(吉川, 1995: 160)

状態動詞と、*grow to V* が持つ段階的変化の意味、さらに *grow* が持つ成熟の意味が状態動詞の中でも嗜好や思考を表す動詞との親和性を高めている。

### 5.2 *proceed to V* と伝達動詞

意思疎通を表す動詞との共起は Brinton (1988: 128) でも確認されていたが、動詞 *do* と共起する理由についてはどう説明すればよいのか。また、なぜ意思疎通の動詞と共起する傾向が強いのかについて十分な説明はみられない。

まず、動詞 *do* 補文で使われる場合を見てみると、代動詞として用いられる例がみられる。例えば、*do so* のような表現で、詳細について伝えた方が良い *fill me in* という勧めに対して応じる場面 (22) である。この場合も、勧めに応じることで、自分が相手の勧めに賛同しているという意味を伝えている。このように、代動詞を伴って「意思を伝える」という意味を *proceed to do* という組み合わせを使って表すことができる。

- (22) ‘You’d better fill me in on the details,’ he said. Putting as much professional coolness into her voice as she could muster, she proceeded to do so, leading him into the side ward, ... (BNC)

また、意思疎通の動詞を好んで補文にとるという事象は、動詞 *proceed* の意味を精査していくことで説明が付きそうだ。実際、OED Online (s.v., *proceed* v. 4.) では *proceed* は行為やスピーチを再開するという意味を持っている。そのことから、意思疎通のための伝達動詞 (Quirk et al., 1985: 1024) と共起しやすいと考えられる。

### 5.3 *commence to V* と過程動詞

動作動詞のなかでも、過程動詞 (Leech, 2004) に分類される *get, develop* が *commence to V* と共起しやすい理由はどこにあるのだろうか。

まず、*grow to V* と比べると *commence to V* は状態動詞とは共起しにくい、*commence to V* は (i) 通例、長期間にわたってまたは入念に準備した行為の開始を表わす (小西 (編). (1980)) ため、行為を実現するにいたるまでの準備段階における状態変化を表すことができる。

次に、過程動詞は (20) で見たように、進行形で段階的な出来事の推移を表すことができる。これらの要因が、動的で、出来事の過程に焦点を当てる過程動詞と *commence to V* との親和性を高めているのではないか。(23a) は進行形 *was commencing* で使われており、*to get drowsy* で表される行為の実現までのゆっくりした状態の変化を表している場面で過程動詞 *get* が使われている。また、動的な *to be* + 動作動詞の受身形、いわゆる使役主の存在を示唆する動作受身 (23b) を取ることも、*commence to V* の動作性の高さを示しており、共通して変化の意味を持つため過程動詞との親和性を高めていると考えられる。

- (23) a. And just as I was commencing to get drowsy, I heard dogs howling. (ukWaC)  
 b. Directly they commenced to be towed towards the shore (by a picket boat), the enemy opened a rapid fire with Maxims ... (ukWaC)

### 5.4 *commence V-ing* と企業活動

*commence V-ing* の特徴は、*operate, run* などを用いて会社や公共機関のサービス開始

を表す点である。動的で、変化を表す動詞と共に起した *commence to V* と比べると、状態動詞と共に起さない。

また、(24) にある機関車や会社など本来は人ではないので意図は持たないと考えられる主語も、人によりコントロール可能なものであり、会社や公共機関のサービスの再開を表す場合に普通に用いられる。

- (24) a. The company commenced operating as W.G. Richards & Sons, Brodawel, Moylgrove. (ukWaC)  
b. In 1945, the locomotive commenced working at the Comox Logging and Railway Company's Headquarters on Vancouver Island. (ukWaC)

### 5.5 *resume V-ing* と意図的行為

最後に、Freed (1979) は *resume V-ing* が達成動詞や到達動詞と共に起しにくいもしくは共に起さない理由について十分に説明できていない。Freed (1979) とは異なり、本稿では *resume V-ing* は (19d) でみたように、実現段階において再開した行為の継続を表す表現であると考えられる。そう考えることで、*resume V-ing* の持つ継続性・非完結性の意味と、達成動詞のもつ完結性や到達動詞の持つ非継続性の意味とが相いれない性質であることから *resume V-ing* と達成動詞および到達動詞の共起可能性が低いという筋の通った説明をすることができそうだ。

さらに、Freed (1979) では説明されていなかったが、物が主語にくる場合もあり、*Trains* や *his camcorder* などの「人が意図的に動かしたり影響を与えることが可能なもの」であれば (25) のように *resume V-ing* の主語として用いることができる。

- (25) a. *Trains resumed running* the next day, but the release crossover is now out of commission ... (ukWaC)  
b. After this performance was over his camcorder resumed working again. (ukWaC)

## 6. 結語

本稿では、意味と統語との関係性に着目し、起動表現の意味的相違を統語的差異から考察してきた。まず、大規模コーパス BNC, ukWaC を用いた質的・量的調査の結果に基づいて、各表現のもつ特徴的なコロケーションパターンを示した。その後、*grow to V* と状態動詞や *proceed to V* と伝達動詞、*commence to V* と過程動詞や *commence V-ing* と会社等のサービス開始を表す動作動詞、そして *resume V-ing* と継続性をもち具体的な行為を表す動詞のように、特定の語が各表現に共起しやすい理由について議論を行った。そして、各表現が表す意味が補文で用いる語の選択に影響することを実証的に示した。

## 注.

1. 本研究は、関西学院大学大学院に提出した博士論文 Kurazono (2018) の一部を加筆・修正したものである。Kurazono (2018) では、Brinton (1988: 61) で研究対象として挙げられている Aspectualizers と呼ばれる起動表現の中でも *to* 不定詞・動名詞・*to* 動名詞を補文にとる表現を対象に、意味的・統語的相違を明らかにしようと試みた。
2. BNC\_SKE の場合、共起語検索機能を用いて *to* 不定詞構造を従える起動動詞 *grow* (*commence*, *proceed*) の補文にくる動詞を検索する際には (ia) に示す検索式 (コーパス検索言語) を使用し、動名詞構造を従える起動動詞 *resume* (*commence*) の補文にくる動詞の検索の際には (ib) を使用して用例の調査を行った。
  - (i) a. [lemma="grow(commence, proceed)"] "to" [tag="VVI|VBI|VHI|VDI"]
  - b. [lemma="resume(commence)"] [tag="VVG|VBG|VHG|VDG"]
 また、ukWaC の場合、(ii) に示す検索式 (コーパス検索言語) をそれぞれ用いて共起語検索を行った。
  - (ii) a. [lemma="commence"] [tag="TO"] [tag="VB|VH|VV"]  
(*commence to V* の場合)
  - b. [lemma="commence(resume)"] [tag="VBG|VHG|VVG"]  
(*commence V-ing, resume V-ing* の場合)
3. BNC において、起動表現の補文にくる動詞のうち、生起頻度上位にくるものを 10 語リストしている。また、生起頻度に関しては括弧の中に数字で記載している。
4. ukWaC で同様、起動表現の補文にくる動詞のうち、生起頻度上位にくるものを 10 語リストしている。注 2. 同様に括弧内に数字で生起頻度を示している。

## 7. 参考文献

## 文献

- Binnick, R. I. (1991) *Time and the Verb: A Guide to Tense and Aspect*. New York: Oxford University Press.
- Bolinger, D. (1968). "Entailment and the Meaning of Structures." *Glossa* 2, 119–127.
- Brinton, L. (1988). *The Development of English Aspectual Systems: Aspectualizers and Post-Verbal Particles*. Cambridge: Cambridge University Press. Crystal 2008
- Crystal, D. (2008). *A Dictionary of Linguistics and Phonetics* (6th ed.). Malden, Mass: Blackwell.
- Curme, G. O. (1931). *Syntax*. Boston: D.C. Heath & Co.
- Declerck, R. (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Duffley, P. J. (2006). *The English Gerund-Participle: A Comparison with the Infinitive*. New York: Peter Lang.
- Ferraresi, A., E. Zanchetta, M. Baroni, and S. Bernardini. (2008) "Introducing and Evaluating ukWaC, a Very Large Web-Derived Corpus of English," in S. Evert, A.

- Kilgarriff, and S. Sharoff (eds.), *Proceedings of the 4th Web as Corpus Workshop (WAC-4): Can We Beat Google?*, 47-54. Morocco: European Language Resources Association
- Freed, A. (1979). *The Semantics of English Aspectual Complementation*. Dordrecht: Reidel.
- Kurazono, K. (2018). *A Syntactic and Semantic Study of Inchoative Expressions in Present-Day English*. Ph.D. Thesis, Kwansei Gakuin University.
- Palmer, F. R. (1988). *The English Verb* (2nd ed). London: Longman.
- Vendler, Z. (1957) "Verbs and Times," *The Philosophical Review* 66.2, 143-160.
- 藏菌和也. (2016). 「起動動詞 *get, fall, set* に後続する統語形式 *to V, V-ing, to V-ing* 及び補文動詞の選択基準」『JASEC BULLETIN』第 25 巻 1 号, 1-15. 日本英語コミュニケーション学会.
- 小西友七 (編). (1980). 『英語基本動詞辞典』東京: 研究社.
- 小西友七 (編). (2006). 『現代英語語法辞典』東京: 三省堂.
- 吉川千鶴子. (1995). 『日英比較動詞の文法: 発想の違いから見た日本語と英語の構造』東京: くろしお出版.

#### 辞書・コーパスとその略語

- W3 : 『ウィズダム英和辞典 第 3 版』(2013). 東京: 三省堂.
- OLX2 : 『オーレックス英和辞典 第 2 版』(2013). 東京: 旺文社.
- SA5 : 『スーパーアンカー英和辞典 第 5 版』(2015). 東京: 学研プラス.
- G5 : 『ジーニアス英和辞典 第 5 版』(2014). 東京: 大修館.
- YP : 『ユースプログレッシブ英和辞典』(2004). 東京: 小学館.
- OED Online : *The Oxford English Dictionary*. Oxford: Oxford University Press.  
<https://www.oed.com/> (2017 年 12 月 27 日に検索).
- BNC : The British National Corpus (Sketch Engine を利用).
- ukWaC : The UK Web Archiving Consortium (2018 年 3 月 26 日に検索).